

第一章： 「GHQの焚書」とは何ですか？

「禁書」と「検閲」は別物です

「GHQ焚書」という言葉を聞いたのは初めてだと言う人も多いのではないのでしょうか。言うまでもなく、GHQ（総本部）とは、第二次世界大戦後、日本に駐屯していた占領軍のことです。GHQは本を禁止しました。禁書¹流通している本を止めて、それらを思い出している。紀元前3世紀に、中国の皇帝秦始皇帝が儒教のテキストを燃やし、儒教の学者を生かして埋めたという有名な事件がありました。これが「焚書」という言葉の由来です。今日は本のリコールなので、人々はそれを読むことができなくなります。

驚いたことに、戦後の日本でアメリカ軍がまさにそのような野蛮な行為を行ったことは広く知られていません。アメリカは当初から、占領軍が占領国の憲法を執筆することに対して国際法を踏みにじり、新聞、雑誌、放送内容の検閲を行ったり、私信を開いたりするべきではなかった。同様に、彼らが占領した国の歴史を消して、本を禁止し、「焚書」をするべきではなかったのは正しいことです。戦後の憲法は「思想の自由」と「報道の自由」を表現していたが、占領下の日本でこれに大規模に違反したのはアメリカだった。

そういうわけで、いつ、どのようにそれが行われたのですか？占領軍は実際に彼らが政治的に望んでいたことを達成しましたか？そして、「焚書」という用語はアメリカ軍によって使用されましたか？

もちろん、アメリカ軍は「燃やす」ではなく「没収」という言葉を使用し、それを「プロパガンダ出版物の没収」と呼んだ。

日本では前日だけ「歴史書」や「思想書」と呼ばれていた作品が、今ではクールに「プロパガンダ出版物」と呼ばれるようになりました。今年は戦争が終わった翌年でした。敵がそれを呼んでいることについては何もすることはありませんが、私の国と私の同胞は、その戦争で提起されたアイデアと感情と信念を瞬時に落とすことができたかもしれません。政府は、古い敵の要求に応えるために非常に簡単にナックルする必要があるのです。彼らは今それをすべて宣伝と呼ぶべきです—それは多すぎました。そのような

¹原文で使われている言葉は焚書（*円書*）、これは文字通り「焚書」を意味し、本を没収、禁止、および/または破壊するための通常の日本語の用語です。このため、一部の翻訳された情報源は、GHQの「焚書」またはGHQによる「焚書」を参照している場合があります。ほとんどの没収された本、新聞、雑誌がパルプ化されたことを考えると、実際に何が起こったのかを正確に示すものではありませんが、それは真実からそう遠くはありません。

廃棄物。飛び込んで、それはすべて邪悪な宣伝だと言うのは間違った考えでした。占領軍は彼らが手に入れることができるものを没収しました—7,000以上違う本—書店、古本屋、官公庁、倉庫、配送センターなど、全国から。没収の責任者は、すべての都道府県の知事によって選ばれました。警察の権限は、これらの本の押収に反対した人々に対して使用されました。

そのようなことが起こったことは、これまで全く知られていなかった戦後の歴史の秘密の部分に属しています。占領軍の意向に沿ったままのために、政府が日本の方向をどこまで変えたかは今や明らかである。この本を読むことで、それらの結果の範囲を理解するようになると私は信じています。

これは、1945年9月に始まった、新聞、雑誌、映画、放送など、職業全体で行われたあらゆる種類の出版物に対するGHQの検閲とは異なります。これはよく知られています。メディアで働くすべての人は、彼らがしたことすべての2つのコピーを作成し、GHQの民間検閲支隊（CCD）にそれらを送らなければなりません。川田正子の童謡の前に読んだことがあります。『みかんのなな作』（『咲くみかんの丘』）がラジオで放送され、歌詞は打ち切られました。

しかし、ここで取り上げているのは「焚書」（つまり、戦前と戦時の本の没収）であり、これは戦後の検閲とは明らかに異なる問題です。1928年1月1日から1945年9月2日まで、日本では約22万冊のタイトルが出版されました。そのうち、9,288名が審査に選ばれ、7,769名が審査に選ばれました。それらの「没収されたプロパガンダ出版物」として取り上げられ、指定されました。これが私が「焚書」について言及するときに話していることです。

占領軍は7,769タイトルのマスターリストを作成しましたが、実際にそのリストに基づいて全国で没収を行ったのは日本政府でした。

これは、大東亜戦争で日本の闘志を形成する上で決定的に役立った当時の知性の表れであり、占領軍がそれに目を向けるのは当然のことだだと思います。「日本から来たから」という理由で何かを排除すると、歴史の本当の姿を見ることができなくなります。闘志を高めた熱狂的な作品も含まれているとも言えると思いますが、この熱意は歴史の一部ではなかったのでしょうか。

私が言ったように、本の押収は検閲とは別の事件ではありませんでした。確かに、国の歴史の継続の問題として、それは比較的是るかに重要なトピックであると言っても過言ではありません。

これがまだ本格的に取り上げられていないのはなぜですか？これ自体、対処すべき問題です。実際の本自体が日本人の読者の意識から消えてしまったため、調査のきっかけがなくなった気がします。これが、問題を検討したくないという主な理由です。「焚書」は成功しました。占領当局が見抜いた政策、つまり、占領軍に率いられて、国に対する反対の歴史を消し去り、日本を占領するという政策に、国全体が徹底的に取り入れられた。

東京大学文学部の参加

この問題に関してなされなければならない一つの問題点があります。調査は、「焚書」がどのような手順で、誰によって、どのように評価されたかによって、まだ始まったばかりです。60年以上前のものですが、この作品を書いているこの段階では、没収のために本を指定するプロセスの全体像を今でも確認することは困難です。

アメリカ軍の政治的意図は明らかです。現在、占領中の軍の命令と、それらの命令に対する日本政府の対応を検討しています。本が没収に指定された場所（単一の場所であるかどうかはまだ確認できませんが）、その量、期間、およびプロセスをある程度知ることができました。押収後の本の処分方法と残りのおおよその所在を知っています。7000以上の作品のタイトルは長い間知られています。しかし、私たちが理解できないのは、これがGHQを雇用している民間人と日本政府の行政官だけが行うことができるものではないということは実際には理解されていないということです。それよりも、

ナチス政権によるユダヤ人の迫害において、一部のユダヤ人自身によるある程度の体系的な協力があつたことがわかったとき、世界は戦後すぐにショックを受けました。同様に、占領政策には占領下の（かつての敵）人口の協力が必要でした。そのため、ハーバート・ノーマンのような外交官がいました。GHQの内部人事も混同された可能性があります。戦争の責任者だった日本の人々が東京裁判と公務員の追放を命じられていた時期でした。トルーマン大統領とマッカーサー将軍の考えもまた、情勢に大きな影響を及ぼしました。天皇の立場さえも危機に瀕していた時代でした。その時点まで日本が持っていた権威はなくなった、そして今ではすべてが占領軍である新しい権威の下で運営されていました。そして日本の知識人、学者、専門家はその感性に素早く反応しました。

当時はアメリカだけではありませんでした。アメリカ、イギリス、ソビエト連邦、中国などの代表者で構成された反日的な「理事会」が集まり、日本の占領政策に意見を述べた。彼らは、「軍事的または反連合国であり、一般に流通し、保管されている出版物があるという事実」に気づき、それらすべてを押収すべきであると助言した。

このような状況を考えると、日本政府はまったく抵抗することができませんでした。インテリシヤや政府の協力の指示を受け入れた学者や評論家の中には、ある程度はできなかったと思いますが、この「協力」を考えても、中途半端なことを熱心にやっていて、プロセスを妨害することとそれに従わせることの間にはかなりのギャップがあります。

最近、この協力の中心は東京大学の文学部であることが知られるようになりました。今年は、関わった2名の助教の名前も知りました。また、当時有名だった刑法学者がすべてを整理する上で支援的な役割を果たしていたことを確認することができました。後に彼ら全員が文化勲章の受賞者であり、日本アカデミーの会員でした。

日本の歴史は、日本の知識人を代表し、その継続性を断ち切った人々によって作られたものではありませんでした。これが戦後から現在に至るまでの日本の退化の出発点でした。敗北直後の戦争を「振り返る」ことで自分を慰めるために、感傷的な涙を流しただけだったのでしょうか。これは日本人特有の弱さ、しなやかさ、曖昧さだったと言えるかもしれません。しかし、最も厄介なのは、名前とその参加しかわからないことであり、現時点では、彼らの参加がどのように手配されたか、または彼らが何をしていたかについて正確に明確ではありません。60年後、生きている目撃者はほとんど残っていません。以下に、私が知っている限り、詳細を明確にするためのアカウントを作成します。それは言うまでもない、

秘密裏に行われる狡猾な「没収」

1946年3月17日、タイプされた覚書が日本帝国政府に届けられました。頭には当時の最も強力な名前「総本部、連合国最高司令官」が書かれ、受賞者には「日本帝国政府」が与えられました。GHQの東京中央連絡事務所を経由して送られました。覚書のタイトルは「プロパガンダ出版物の没収」でした。識別タグ番号は「AG311.7 (17 Mar 46) CI (SCAPIN-824)」でした。それが事件全体の始まりとなる文書でした。(この本の最後に添付されている「補足1」は、元のタイプされたメモの写真による複製です。) メモは次のように読みました。

1. 日本政府は、すべての国民から収集するように指示されています
倉庫、書店、書店、出版社、流通業者、すべての商業施設、またはこれらの出版物が大量に保管されている日本政府の機関を含むチャネル、以下にリストされている宣伝出版物。

- a. 戦争と建設（朝日新聞社）1943年12月。
- b. 朝日新聞トクホン（戦時新聞読本マニュアル-平田時次郎）1940年12月。
- c. 金大海戦（現代海戦-毎日新聞）1941年10月。
- d. Bei Ei Chosen No Shinso（アメリカとイギリスの日本への挑戦の真の状態-有田八郎）1943年10月。
- e. ショメム[sic。]彦平徳本[sic。]（ジュニア航空隊の読者-陸軍I編成部）1943年11月。
- f. Bei Ei No Toa Kokuran（American-British Disturbance of East Asia-Hachiro Arita）1943年12月。
- g. Bei Ei [sic。]世界信龍（アメリカの世界侵略）

- [sic。]-健作[sic。]堀内) 1944年8月。²
h。大東亜の剣雪 (大東アジアの建物-エイジアモ) 1944年11月。
私。Fujin Asia (Asiatic Women-Mainichi Newspaper) 1942年1月から1944年9月まで毎月。
j。さくら (さくらんぼ-毎日新聞) 月刊。

2.これらの出版物は、中央に収集および保存されます倉庫。これらの出版物をパルプ化のために処分するための指示は、後日、この本部によって発行されます。

3.定期報告書は、それぞれの15日と最終日に提出されます。1946年3月31日から、連合国の最高司令官である総本部への月。この報告には以下が含まれるものとする。

- a。中間期に収集された出版物の名前と数
- b。各情報源から収集された出版物の名前と数を含む、入手元の情報源
- c。出版物の総数
- d。総重量
- e。ストレージの特定の場所

4.個人の家や図書館の個々のコピーは免除されます上記のアクション。

最高司令官の場合：[署名済み]

BM FITCH、
Brigadier-General、AGD、
Adjutant General

覚書で取り上げられた10作品のうち、9作品の出版社は不明でしたが、現在は出版社が毎日新聞。著者が名前を挙げられていない3冊の本があります（彼らは現在知られていますが）。これらの10のタイトルをすべてまとめると、奇妙です。タイトルの間違いも目立ちます。

言い換えれば、最初は、アメリカ軍が彼らの前にある本を機能的にそして恣意的に選んだので、それは無計画に行われた。彼らは当初からこの計画の実施を着実に増やすことを決意し、全面的な没収のために日本人の支援を得たことがわかります。当初、計画の詳細の大きさを疑う人は誰もいなかった。それにもかかわらず、彼らは、少なくとも以前に何度もそれを行ったかのように、没収プロセスの方法論と方針に固執していました。

注意しなければならないのは、「個人の家や図書館の個々のコピー」に関する行です。つまり、当初、私的または図書館に保管されていた作品は没収の対象ではないという発表がありました。代わりに、対象となる本を削除するために、書店や出版社だけでなく、公共の回路全体を徹底的に検索する必要がありました。

日本政府がGHQからの指示を受けて介入した後、それは一貫した首尾一貫した政策でした。正確には、職業当局は日本人の世界を知りませんでした

本、そして彼らはそれについて何の研究もしなっただけでなく、彼らが実際にしたのは方針を決めることだけでした。それが重要なポイントです。

私は他の国の事例を調べて、占領地を支配するときにアメリカ軍、そしておそらくイギリス軍、または一般的には西側が同じように行動したかどうかを確認しなかったのが、この問題は残念ながら私にはわかりません。民間人や図書館の本を除いて、国の政府を密かに利用して、同国人の知らないうちに公道からの没収を行うことは非常に狡猾な政策です。占領軍は、本の没収が文明国ではできないような歴史の破壊であることを知っていたため、本を燃やす者としてのイメージを得ることに懸念を抱いていました。³これについては後で触れますが、没収の実行に関与した人々は、関係のない当事者に彼らの活動について何も知らせないように厳しい命令を受けていました。これがやや巧妙で手に負えないように聞こえないかどうかを検討してください。いずれにせよ、アメリカは自由と民主主義の名の下に日本を占領しました。これは言論の自由と報道の自由を表現する憲法を告げる明るい新時代への幕開けでした。

日本がまだ爆撃されていたときに書かれたアメリカ統合参謀本部の極秘文書（JCS文書1,231 A-18、A-19、1945年1月12日付け）は、「日本人の理想の拡散の禁止」を指示した。アメリカ艦隊が「さまざまな西部と南西部の島々、そしてクリレ諸島」を占領することになった場合の行政原則としての「あらゆる形態の軍国主義と超国家主義」。

帝国図書館長官室と首相官邸での秘密会議

1946年3月17日付けのGHQからの「プロパガンダ出版物の没収」と題された覚書第1号の日本政府への配達から、1948年4月15日まで、合計48の同様の覚書（および補足覚書第46号））配信されました。（添付の「補足2」を参照してください。）

それらをよく見てみると、何か面白いことに気づきました。第14回（1946年12月2日付けの補足覚書第13号）から第33回（1947年9月2日付けの補足覚書第31号）までの間に、没収される本の項目数が急増した。この本の最後にある補足に注意してください。特に、33冊目から、突然500冊の本が毎回没収されるように指定されました。それは月に1,000タイトルになります。最初は10タイトル（多かれ少なかれ）でしたが、すぐにエスカレートし、瞬く間に数千の急流になりました。

私はそれがその時点であったと推測します（そしてこれは最終的には単なる推測です）

³ここでも著者は、この用語を使用して直接のアナロジーを作成します。「ふんしょうじゅ」（焚書坑儒）、秦始皇帝による儒教の古典の燃焼と生きている儒教の学者の埋葬に。非常に野蛮な行為に匹敵する何かをしていると見なされることは、占領当局が避けたかったことです。

日本の協力者が参加し始めたこと。現在、国立国会図書館には、「焚書」に耐えた本の元の合計7,769冊の約80～90パーセントが1部ずつ保管されています。アメリカ軍は図書館から本を没収しなかったのも、これは当然のことです。私が最近行った調査に対して、国立国会図書館は、実際にサンプリングを調査した結果、80～90%を保有していると推測したが、すべての追跡調査を行っていないと述べた。特に、特別なマーキングやカタログ番号に関して、同じ時期の他の本と同じように扱っていました。

GHQの「焚書」を受けた本に特別な扱いの必要性を感じなかった理由の説明は、国立国会図書館の所蔵品がGHQによって没収されたことは一度もないということでした。現在の国立国会図書館の所蔵は、当時の帝国図書館の所蔵の続きのようです。さて、GHQからは、「没収のためのプロパガンダ本の指定は、帝国図書館の所蔵などに基づいて行われた」という非常に重要な証言があります。

つまり、「焚書」の舞台となるのは中身帝国図書館。調査員が本を手に入れ、スクリーニングし、選択する必要があるとき、彼らが使用した本はそれらでした非常に同じもの現在、国立国会図書館で開催されています。（GHQが没収のタイトルを指定する際に使用した元の本がメリーランド大学に送られたと述べている別の記録があります。）

原本は1冊ずつ図書館に残されていますが、いずれにせよ、GHQは、没収のためのリスト作成のさまざまな段階で、文部省と警察の支援を受けており、没収の手続きは、すべての県知事に送られた命令でした。

当時の帝国図書館長であった岡田奈良の回想録から、上記に関して非常に重要なことは次のとおりです。

議論を1947年に戻すと、出版された作品の見解の表現を一掃するための調査がその年に始まった。戦時中および戦前の出版物が帝国図書館で開催されたため、同年4月14日、外務省の矢野氏が図書館に来館しました。彼はこの事件に協力する方法を模索しており、出版された作品のページに関連する調査を目的として小委員会が設立されました。外務省政治部副局長の田中氏、矢野氏、内閣敵対関係終結局長の大田氏などが担当した。専門家として尾高邦雄さんと金子武蔵さんが東京大学の助教でしたが、私もそうです。小委員会は通常、図書館長室で会合した。委員長の牧野栄一氏の監修のもと、首相官邸で会合が開かれた。国立図書館がこのような国の政策に協力しなければならないのは当然のことであり、仕事としてはあまり快適ではありませんでした。⁴

彼はその問題をさりげなく語りますが、それは並外れた重要性の証言ではありませんか？

この目立たない回想録に、小高国男、金子武蔵、牧野栄一の3人の著名な学者の名前が突然現れたことに、私は何とも驚いた。これは衝撃的な発見です。実際、戦後の思想の歴史を知っている多くの人々にとって、しばらくの間、彼らは何を考えるべきかわからないかもしれません。

すでに述べたように、1947年9月をカットオフポイントとして、毎月押収される本の数は1,000冊に上りました。タイトルの処理が突然体系的かつ効率的になったため、専門知識のある人が「焚書」操作に関与したことは明らかでした。

添付の「補足2」に再度注意してください。社会科学と人文科学の代表である2人の日本人学者が小委員会に加わり、その後ろに上級法学者が「本委員会」の委員長として本の没収の問題を監督したとき、それはその同じ年に他なりません。1947年。

小高国男、金子武蔵、牧野栄一

尾高邦雄（1908–1993）は、産業、労働、ビジネスのバックグラウンドから生まれました。彼の兄のトモウは法哲学の学者であり、彼の弟のヒサタダは作曲家であり指揮者でした。彼の母親は渋沢栄一子爵の娘でした。⁵彼は戦後を代表した学者だったと言う人もいるかもしれません。小高はマックス・ウェーバーの *Wissenschaft als Beruf*（『職業としての科学』）日本語に翻訳し、ウェーバーのボリュームを担当しました *世界の名町*（『世界の偉大な文学作品』）ChūōKōronshaから出版されました。彼は一般の読書家に知られている名前でした。

金子武蔵（1905–1987）は西田幾多郎の6番目の娘と結婚しました。⁶和辻哲郎の東京大学日本倫理学部長の後継者。ヘーゲルに関する彼の研究は有名であり、彼はカント、ジャスパーズなどについて書いています。私は彼の1967年の作品を読んだことを覚えています。キェルケゴールからサルトルへ（『キェルケゴールからサルトルへ』）。当時の私からの印象では、それは哲学者へのシンプルでわかりやすい紹介でした。1958年、彼は東京大学の文学部の学長だったので、彼の名前は私の卒業証書にあるに違いありませんが、彼のクラスを受講したことを覚えていません。

牧野英一（1878–1970）は、小高と金子よりも古い世代でした。彼の1909年の作品では、*けいじがくのしんしちょうとしんけいほう*（『刑法と思考の新しい傾向と新しい刑法』）、彼は刑法の理論に革命を引き起こしました。彼は

⁵渋沢栄一（1840–1931）は「日本の資本主義の父」として知られています。彼は日本初の株式銀行、東京証券取引所、日本商工会議所、そして何百もの企業や企業を設立しました。

⁶西田幾多郎（1870–1945）は、影響力のある哲学者であり、「京都学派」の創始者でした。

戦前に東京帝国大学の法学教授を務めていた間、学界のリーダーとしての地位を擁護したカリスマ的な学者として知られています。彼は私が知らない分野の人であり、別の時代の世界にいたので、私は「そうだ」と言います。彼は1938年に定年を迎えましたが、92歳で亡くなり、長生きしました。戦前、戦時、戦後の3つの年齢が経つにつれ、茅ヶ崎の自宅で勉強に囲まれた伝統的な定年生活を送りました。。

牧野は明治初期に青春時代を過ごし、⁷まだ江戸時代の雰囲気が残っていました。明治末期から大正初期にかけて活躍。小高国尾と金子武蔵は違いました。大東アジア戦争が勃発したとき、小高と金子はそれぞれ33歳と36歳で、いわゆる戦争世代に属し、友人の大部分が遠くの戦場に散らばっていました。彼らの著作と活動は、終戦後に始まりました。

これらの3人の男性がGHQの本の押収にどのように参加したかを正確に示す具体的な証拠がほとんどないことに私は困っています。追悼文（非売品）を集めた本しか見つけれませんでした。金子武蔵毅（「金子武蔵：回想」）。その中で私は思いがけず「⁸「金子武蔵先生の筈」（「金子武蔵先生について」）小高邦夫にほかなりません。

金子武蔵先生に初めて会ったのはいつだったのでしょうか。若々しい金子が東京大学の助教になったのはおそらく1938年だったと思います。その頃のある会議で彼に紹介されました。その時の印象は、彼は背が低く、仏陀のような顔をしていて、外見を気にしない男だったということでした。

第二次世界大戦後、GHQによる戦争犯罪の捜査が始まると、東京大学文学部にもそのための委員会が結成された。どういうわけか、彼と私は両方とも委員会に選ばれました。それで、ある日、委員会がその事業を行っていたとき、私たち二人は、ひびや交差点近くのGHQに行くように頼まれました。公式訪問でしたが、私たちの個人的な見た目は並外れたものでした。戦争の被害でまともなスーツは持っていませんでしたが、金子先生はさらにひどい状態でした。彼はぼろぼろの国民服のジャケット、だらしないズボン、使い古された靴、そして頭の後ろに腰掛けた疲れたフェルトの帽子を持っていました。重い階段を上って、第一生命ビルの手入れの行き届いた素晴らしい階段を登りました。⁹「私たちに会いに来た二世の役人は、私たちを上下に見つめながら驚いた。しかし、金子は私たちの研究の結果を冷静に説明しました。

ご覧のとおり、彼らの参加は明らかです。また、東京大学文学部に「戦争犯罪捜査委員会」が結成されたという明確な証拠があり、委員会に若い二人組が選ばれたのは、おそらく学部会議の意図だったのだろう。

おそらく、最初のGHQ覚書が日本政府に届けられた1946年3月17日から、第33回覚書が送られた1947年9月頃までの期間であった。

⁷明治時代は1868年から1912年まで続きました。大正時代は1912年から1926年でした。徳川幕府の政権であった江戸時代は1603年から1868年でした。明治維新で終わりました。

⁸GHQは第一生命ビルを引き継いで事務所になりました。

日本政府から東京大学への協力要請があり、文学部に委員会が設置されました。（当時の東京大学学長は南原繁）2名の助教が委員会に招集され、最終的には帝国図書館に召喚され、「専門家顧問」として出版物を一掃するための「小委員会」に参加した。図書館長を務めた岡田奈良の事務所です。私が理解しているように、これが一連のイベントです。

その結論で、公邸の会議室で、真希栄一が「本委員会」の会議をビジネスライクに率いて、どの本を押収するかを承認する仕事をしていると思います。首相の。

同時に、金子武蔵は時事批評を書いた「大泉の神力反省」（「戦争に関する人間的な反省」）と「日本人のしめいについて」（「日本人の使命について」）。⁹

そこに何らかのヒントがあるかもしれないと思って、私はすぐにそれらを読みました。しかし、それらはまるで西洋の哲学者の名の下に出てきたかのように日本を反映した種類のありふれたエッセイでした。私はこの問題とはまったく関係がないことを認識できませんでした。

すでに発表したGHQに行った金子氏との「調査結果の説明」以外に、小高邦夫氏がGHQと協力した痕跡は他に見当たらない。

見逃せないのは、1947年4月から1948年5月まで、牧野栄一が中央公務員適性審査委員会の委員を務めていたことです。言うまでもなく、これは当時の日本人を苦しめました。それはGHQによる公務員の追放に協力するために設立された委員会でした。ここでも、彼はかつての敵の側にいて、前日まで友達だった人たちを裁く役割を果たしていました。彼はまた、1948年7月から1958年11月まで国立国会図書館で専門家の審査官として働いた。占領軍の要請で自国からの本の押収を全国的に拡大する、忌まわしい「本を燃やす」政策。同じ1948年7月から占領の終わりまで（言い換えれば、平和条約が締結されるまで）、

しかし、これら3人の学者の参加に関する正確な詳細は、濃い霧に包まれたままであり、まだ説明されていません。

没収のために占領軍の本のリストを作成した人々によって善と悪を分離する

これについてはすでに概説しましたが、GHQの民間検閲支隊（CCD）の主な活動は、マスメディアをチェックすることでした。言い換えれば、人々の前に出ている情報を検閲することです。これが個人のメールを開くことにも及ぶという点まで、戦後の歴史ではその悪い評判は悪名高いものになりました。CCDの1つのブランチは、Press、Pictorialでした。

放送課（PPB）。PPBのサブブランチは、禁止される戦前の本のリストを作成する目的で形成された研究セクションでした。とりあえず、研究課を「没収のためにプロパガンダ出版物のリストを作成した人たち」と呼ぶのは公平だと思います。あらゆる点で、彼らの目的はリストを作成することでした。彼らは実際の没収を行ったグループではありませんでした。（日本政府に実施してもらうという発想でした。）

民間検閲支隊はすでに世間の注目を集めているマスメディアの監視に深く関わっていたので、余裕のある有能な人々はいませんでした。したがって、研究部門には、軍隊を雇用している6人のアメリカ人民間人（2人の高官と4人の他の高官）だけが職員として所属していた。彼らは彼らの没収作戦に着手したが、単にそれができなかった。研究部門は日本人の助けを求めるしかありませんでした。彼らは彼らの数に9人から25人の日本人を加えたようです。

彼らの名前を知りたかったので、国立国会図書館で調べ始めました。当時の電話帳からは、アメリカ人の一人、FAボナー中尉の名前しか確認できませんでした。日本人スタッフの名前がわからなかった。スタッフのリーダーとして小高国王と金子武蔵の名前を期待していたのですが、うまくいきませんでした。

没収の対象期間（1928年1月1日から1945年9月2日）までに押収された出版物の総数は221,223冊でした。その中から、没収された出版物に当てはまると思われる9,288件が最初に選ばれました。この最初の大まかな選択は、決定的に重要であるはずでした。しかし、今それを見ると、分類は滑稽でした。なぜ選ばれたのかと思う本もあれば、かつての敵の立場から見ても危険だと思ってなぜなのかと思う本もあります。いいえ。操作は精度に欠けていました。人材と時間の不足があったと推測できますが、有能な人材の不足もあったのかもしれません。

私は今、アメリカを経由してやって来た当時と場所からコピーされた数百ページの資料を手に入れています。厳選された出版物の英語による説明が含まれています。2つか3つの実例を紹介したいと思います。（本巻巻末の「補足3」を参照。）ここのように丁寧に説明を付けていくと、時間も人手もすぐに足りなくなる可能性があります。本の評価自体に正直だったと思います。上映され調査された9,288冊の本があり、最終的に7,769冊の本が没収に指定されました。1946年3月、もみ殻から小麦を分離する事業が始まりました。順番に46回の決定が日本政府に伝えられ、1948年7月に彼らは立ち止まった。リストの最初の絞り込みと比較して、2番目の操作はより時間がかかり、それを考えることにもっと注意を払っていたに違いありません。それは彼らが決定したタイトルの85パーセント（多かれ少なかれ）を選んだからです。

日本人の知識人が誰で、いつ、どこで、何をしていたのかわからないのは困ります。

教育副大臣の指令による没収の全国的な拡大

民間検閲支隊報道・絵画・放送部研究部が作成した没収指定書のリストは、中央連絡事務所を経由して日本政府に指示として伝えられた。

前に説明したように、これらの順序は46の厳密なディレクティブに分割されました。当初、日本の警察は本の没収を行うことになっていたが、1948年6月から文部省の社会教育局に移管された。これに伴い、文部副大臣から、全都道府県知事に没収の責任者となったことを通知する指令が出されました。（添付の「補足4」を参照してください。）

この指令を注意深く読むと、さまざまなことが明らかになります。とても正確な注文でした。副大臣は、県知事に警察と協力するよう指示し、知事は、市町村から教育関係者を「没収官」に選任するよう求められた。ただし、地元の教育者は選考を免除されることになっており、学校の図書館から本を没収することは控えるべきです。代わりに、出版社や書店で関連する本が完全に押収されることになっており、それはそれらの破壊の徹底を要求しました。また、流通中や流通中の作品を見落としてはならないとも言っています。その一節を見て、「新刊を売る店、古本を売る店、本を貸し出す店のインテリア、そしてその物置を含めて、」その徹底性を理解することができます。この指令は、GHQから日本政府に送られた最初の覚書の項目1と4の精神を実行しました。彼らはまだ日本の本の世界をよく知らなかったので、最初に明確な目的を決めただけでした。

没収だったので、取った本にお金は払われませんでした。該当する本の捜査と没収、言い換えれば、それらを探して奪うことについては、「没収と捜査は、取り扱われる人の協力を得て行われるべきものです。しかし、没収の対象者が捜査や没収について不満を述べた場合、または没収者が危害などを恐れている場合は、警察官の支援を求め、職務を遂行することが求められます。」

副大臣の指令の第5項には、抵抗する者が1936年6月12日付けの帝国条例第311号に従って罰せられると記されている誤りがあります。正確には、それは「帝国条例第311号」です。。占領目的を害する行為に対する処罰について」発表6月12日、1946年。調べてみたところ、これがわかりました。彼は「1946」を「1936」と誤解しました。その文書は、帝国の法令により、GHQの目的に反して行動した者は罰せられると宣言しており、第4条は、違反者は「勤勉または最高75,000円の罰金、または拘留で最高10年の刑に処せられる」と述べている。またはマイナーな罰金。」

没収官は携帯しなければならず、没収された本の詳細については、本が没収されていた場所に運ばれる「没収された仕事」のチャートが作成されました。（添付の「補足4」を参照してください。）

興味深いのは、彼らがこれだけをしたのに、それはすべて秘密裏に起こったという点です。GHQのデザインは日本人に知られることはなかったので、彼らは神経症に隣接する懸念を持って震えていました。項目9は、「この問題に関する作業は、関係のない者には開示されない」と述べた。没収された役員の身分証明書の裏にある項目3には、「これらの操作に関与していない人に、これらの操作の実行について知らせてはなりません」と書かれています。

私が言ったことは、東京大学、帝国図書館、そして「焚書」に関連する首相官邸で行われたすべての会議が秘密の会議であり、書面による記録が残っていないことを意味していると確信しています。関係者のいずれかが回想録にいくつかのゆるい言葉を入れてしまうと、私たちの目は受け皿と同じくらい大きくなります。それは不思議な世界であり、推論以外の方法で事件全体を再構築しようとする私たちの能力を超えた世界です。

私の読者の誰かが、この謎を解明するのにもっと役立つ誰かからの新しい情報を見つけたら、私に知らせてください。私の物語は、私が現在理解しているデータの状態を考慮して、私がまとめることができた推論に基づく物語にすぎません。

いずれにせよ、不思議なことに、この文書は、個人所有者や図書館からの没収は行われず、学校の教師は状況を知らされておらず、外部の関係者はそれですが、それだけです。この厳格な秘密の違反に関連する特定の罰はありません。彼らは人々の舌を制御することができませんでした。それでも、日本社会は麻薬に麻痺したかのように動けなくなり、60年以上にわたって彼女自身の過去を封じ込め、この「焚書」が起こったことさえ完全に忘れてしまった。

これは人間性の謎によるものでしょうか？それは日本の特定の敗北の感情によるものでしょうか？それは心理的な罟を仕掛けるアメリカの占領軍のスキルでしょうか？それとも、それは「焚書」に過ぎず、集団虐殺のようなものではなかったからでしょうか。逆宣伝では、軍事書が

悪魔の本にラベルを付けましたか？（日本には軍事組織がありましたが、日本自体は軍事的ではありませんでした。そうだとすれば、当時のアメリカも同じだと言えます。）これは日本人の心の奥底にタブーを生み出しましたか？そして、彼らがそれを知る前に、彼らは自分たちの歴史を気にせずに安心して考える自由を失っていたのでしょうか？

占領軍は大失敗したような感覚を持っていた

興味深い結果が1つ残っています。占領軍は必ずしも達成感や満足感を持っているわけではなく、「焚書」作戦は明確な成功とは言えないという失敗感を残していました。

早い段階でうまくいかないと感じた方もいらっしまったようです。1946年4月15日付けのマッカーサー将軍への覚書（中央連絡事務所文書第173号）は、戦前から終戦までの期間の日本の出版物の印刷された部数は、一般に、数が少ないと述べている。そして多くの彼ら散らばっていたものは、日本の都市へのアメリカの爆撃で灰になりました。

占領の初期には、アメリカ人が自分たちで押収して処分したものがありませんでした。書店は、押収された品物に対して補償がないことに不満を持っており、協力的ではありませんでした。原則として、民家に故意に保管または隠されている作品には触れられませんでした。究極の失敗の原因は、没収業務に携わっていない人に知らされないように命じられたためと言われており、国民全体の協力を求めることは困難だった。

それでも、作戦期間中（1946年3月から1948年7月まで）の日本政府の支援により、押収指定作品7,769点に絞り込まれ、合計38,330点の没収に成功した。各報告期間中に没収されたすべての作品の総数の正確な記録をまとめた、両側からの指示ごとに作成されたチャートがまだあります。（添付の「補足5」を参照）

チャートは順番に並んでいるが、県知事の行動を促し、全国に没収活動を拡大した文部副大臣の指令は、チャート終了直後、つまり1948年7月以降に発行された。the 実際没収された本の総数はいいえ38,000アイテム強。もっと多かったはずですが、それらの番号の文書は見つかりませんでした。

学生の頃、古本屋さんでこういう本をよく見かけました。かなりの数のアイテムがGHQの調査から隠されて逃げたのではないかなと思う必要がありますが、私にはわかりません。

アメリカに送られた多数の作品の所在

公式には、私有の本や図書館に保管されている本はそのまま日本に残っていたが、GHQに押収された本はほぼ完全にパルプ化され、日本の学童向けの本として新たな命を吹き込まれた。

残念ながら、現時点では、民間検閲支隊の報道・絵画・放送部門の研究部門が没収の決定に使用した元の本が、実際に国立国会図書館に収容されているのか、それともそうであったのかはわかりません。別の本。彼らが同じである場合、研究部門は彼らの仕事に着手するために当時の帝国図書館に行進しました。

別の文書によると、CCDライブラリに保存された後、使用された元の本はメリーランド大学に出荷されました。

ここでは、占領中に日本で押収された本、定期刊行物、新聞などの一般的な手段について簡単に説明します。

アメリカに出荷されました。通常、2つのルートに分けられます。

1つのルートには、CCDライブラリに収集された後、レビューのためにCCDに提出された作品があり、GHQで働いていたメリーランド大学のGordon W. Prange教授によってメリーランド大学に送られました。これは、約71,000冊の本とパンフレット、14,000冊の雑誌、18,000冊の新聞、地図、ポスター、写真などを含む膨大なコレクションです。もう1つのルートは、ワシントンドキュメントセンター（WDC）で、保管される前に簡単に保管されていました。アメリカ議会図書館と国立公文書館に送られました。

戦後の出版物や手紙の「検閲」と戦前と戦時の出版物の「焚書」は、そのように区別されなければならない2つの別々の問題であると何度も言いました。日本からアメリカに送られる資料の量は膨大で、2つは複雑に混ざり合っていたので、もちろん簡単に分けることはできません。しかし、検閲されたカテゴリーのアイテムはメリーランド大学に送られ、プランゲ文庫を形成し、「燃える」と指定された没収された本は日本でパルプ化を免れ、ワシントン文書センターに移されたと大まかに言っても過言ではないでしょう。。もちろん、プランゲ文庫には没収に指定された本があるようです。これについては後で検討します。

このように考えてみてください。日本の歴史、特に彼女の闘志の形成の背景を知る価値のある庄和の歴史に取り組んでいるのは、アメリカに徹底的に出荷されたという事実です。

プランゲ文庫は主に占領時の出版物であり、ワシントン文書センターのコレクションは主に戦前と戦時の作品で構成されていることはすでに述べました。しかし、プランゲコレクションには、当時文庫省によって無料で引き渡された、明らかに没収のために指定された戦前の本が4,500冊あったとプランゲは書いています。しかし、最近メリーランド大学に問い合わせたところ、資料の存在を確認することができませんでした。大学には現在未完成の4,000～6,000冊の日本書があり、その大部分は内務省の海軍図書館文書、没収文書、戦前の検閲文書です。もしあれば、どれを知る方法を知る方法はありません。そのうち、文部省から引き渡されました。これらの資料は積極的に公開されていませんが、興味のある人には公開されます。

占領中に検閲されたもの以外のプランゲ文庫の作品、すなわち戦前と戦時の本については、坂口英子による調査報告があります。¹⁰プランゲ文庫には、1945年8月15日より前の37冊の本しかなく、1947年の日付ですべて「没収された本」として識別されます。

それらの37冊がそれらの4,500冊の本の中にあったかどうかは確かにわかりません。

プランゲ文庫の主要な集大成内容である占領時代の検閲で使用された文書は、1970年頃に日本人に知らされ、1972年に国会は資料の返還を要求する問題を取り上げました。それらの重要性を考慮して、国立国会図書館はそれらのマイクロフィルム化を開始しました。雑誌と新聞のセクションのマイクロフィルムは、これで終了するはずですが、これは、日本で読むことができるようになったことを意味します。

一方、戦前と戦時の「焚書」については、正確な所在は不明です。私が言ったように、それらはプランゲコレクションの分野に適合しません。

ワシントンドキュメントセンターで没収された本は、主に米国議会図書館に送られたものであるとすでに述べました。このコレクションに含まれるとされる27,000点のうち、23,000点は帝国陸軍および海軍に関連する作品であり、1974年に防衛庁（現在の防衛省）に返還されました。

また、戦前の内務省により非愛国的であると検閲された文書の一部が返還され、現在は国立国会図書館にあり、内閣や各省庁に関連する資料が返還され、国立公文書館に保管されています。。「占領中の発作を標的とし、米国議会図書館に保管されている出版物」（「補足6」を参照）は、それらすべてを調べたものであり、重要で非常に役立つページです。

よく見てください。私たちが探している没収された本は、シリアル5ナンバー1としてそのチャートに載っていることは確かなようです。

シリアル5のこれらは多数を占めており、それらの目録作成作業は'96年までに終了しましたが、'93年から'96年までの目録作成だけで60,000件に達しました。言うまでもなく、それ以前から目録作成が行われており、正確な巻数はわかりません。また、米国議会図書館は、没収の対象となるもののほか、戦前から日本の本や雑誌を収集しており、それらと合わせてオンラインカタログに掲載されており、参照することができます。¹¹

インターネットで調べてみると、押収された本の大部分がそこにあることがわかりました。つまり、彼らが米国議会図書館にいることを確認しました。これはすべての本を調べた結果ではないことを事前に述べておかなければなりません。むしろ、それはそれらの選択されたサンプルを検索することからです。

これら以外に、私が言ったように、80から90パーセントは日本の国立国会図書館にあります。

インターネットでの調査から、米国議会図書館にある日本の本のコレクションは大規模で網羅的であることがわかりました。没収された本がそこに集められているわけではありません。むしろ、同じ著者の本（「焚書」を避けたもの）は、彼らの完全な作品の綿密に保管されたコレクションのほとんどすべてにあります。

東京トライアルとのつながりの可能性

1946年4月4日付けの民間検閲支隊研究課（没収のための作品のリストを作成したグループ）からの覚書には、次のように書かれています（そして日付を考えると、没収作業が始まったかどうかはわかりません;それは進行中の初期段階でした）：

大東亜共栄圏研究所の図書館で開催された約15,000点の作品は、ワシントンドキュメントセンターのアドバンスチームの手に渡っています。主に英語と日本語の参考図書であり、すでにワシントンドキュメントセンターに発送されています。西洋の本に関しては、アメリカの役人の私物として取り上げられたものもあれば、帰国時にプレゼントとして取り上げられたものもあります。多くが失われます。

これは、勝利者が略奪された商品を大まかに扱っていることを示しています。日本に到着したばかりの当局者は、手に入れることができるものは何でもかき集めてアメリカに送ったり、自分のものと見なしたりしました。これは、GHQが本の没収の命令を詳述した最初の覚書を日本政府に送っていたのと同時に起こっていました。

その同じ年の4月24日、GHQの外交部長であるGeorge Atcheson, Jr. は、次の覚書を書きました。私とGHQ外交部は、没収された各出版物を5冊受け取りたいと考えています。」

4月26日、アメリカ軍の諜報部門はAtchesonに彼の要求に同意する返答を送りました。

このように実施すれば、この早い段階で数万冊の重要な本がワシントンに出荷された可能性があります。

何が起こったのかわかりません。研究部門が2年3か月の秘密のスクリーニングと調査のプロセスを経て、本に「有罪」の評決が下されるまで、最終的にリストをまとめたケアは評価されるべきでしたが、それを利用することによって混乱の前に、他の野生の怒りは見過ごされていました。現在、米国議会図書館に集められるためにワシントン文書センターを通過した何万冊もの重要な日本の本のそれぞれが海を渡って進んだ経路を調べる方法はありません。

記録のために、外交部長のジョージ・アチソンは、朝鮮戦争中の国務長官のディーン・アチソンと同じ人物ではありませんでした。彼は国務省からマッカーサーの政治顧問を務めるために日本に派遣され、対日理事会の議長を務めていました。彼は1947年に飛行機墜落事故で亡くなりました。

[T]東京の政治顧問、ジョージ・アチソンは大統領に書いた
1946年1月4日のトルーマンは、「日本が完全に民主的であるためには、天皇制
は消滅しなければならない」と述べた。

。。。
ジョージ・アチソンは11月6日に将軍[マッカーサー]に裁判を促進
するよう提案した。

マッカーサーは11月7日に政治顧問に、逮捕されるべきだと思ふ人物をリス
トアップし、証拠を提出するよう求めた。主にワシントンからの情報に基づい
て、アチソンは11月と12月に、カナダの外交官ハーバート・ノーマンの助け
を借りて彼のスタッフのロバートA.フィーリーとジョンエマーソンによって編集
された4つのリストを提出しました。¹²

アチソン氏は、関係国と本の没収の問題について話し合っていたと
き、対日理事会の議長を務めていました。ソビエト連邦と中国は執拗な攻
撃を行い、日本の政治的構成を完全に破壊するよう要求したが、彼はそれ
らを無視した。しかし、この件に関しては、彼は日本側に耳を傾けようと
していませんでした。

日本を罰するというアチソンの目的は、ハーバート・ノーマンが東
京裁判で裁判にかけられる名前の選択に貢献したこと、そしてアチソン
自身が「皇帝制度」の消滅を提唱するトルーマンに手紙を書いたことに示
されているように、本当に明確です。GHQの中心で、彼はもちろん「焚
書」に関心があり、彼は必ずそれに参加しました。

ハーバート・ノーマンは戦後すぐに日本に行き、カナダ市民として
GHQのメンバーになりました。彼は現在自由に活動できる日本共産党の指
導者と深い関係を築き、彼らの会話に基づいてクラスAの戦争犯罪者を告
発する文書を書いた。私は現在、ノーマンが「焚書」にどのように、どこ
で関わったのか、あるいは実際に彼が関わっていたのかどうかについて、
完全に暗闇の中にいます。これは、検察が東京裁判で「チャージワン（平
和に対する罪を犯す陰謀）」で示したように、その陰謀は「1928年1月1日
から始まった」からだ。それはまったく同じ日それは本の燃焼期間の開始
に指定されました。

「焚書」についてのすべては謎に包まれています。小さな事実を結び
付けることによって推論を生成する方法については、すでに説明しまし
た。協力させられた犠牲者と喜んで協力した人々は、彼らが恥じるべきこ
とをしていることに気づいていました。しかし、罪のない顔をして、彼ら
は犯罪を続けました。

焚書は魂を売る行為だからです。

日本は戦争に負けましたが、「焚書」の理由はまったくありませんで
した。理由はありません生きている基盤あらゆる国の政治、思想、歴
史、文化、倫理、軍事、外交、そして最後に宗教は、他の人々によって判
断されます。他の人が指摘したとき、戦前と戦時の姿勢が断定的であった
ことを日本が否定するのは間違いでした。それは大失敗でした。彼らの本
は燃やされて失われたので、戦後、彼らは彼らがただ生きているという事
実にさえ気づいていませんが、彼らは彼ら自身ではありません。

最近の日本と最近の日本人の意気消沈した姿はそのルーツを持っています

没収された本のサンプル

没収の対象となったのは、正確にどのような種類の本でしたか？最後に、ここでいくつかの異なるグループに分けられた、いくつかのランダムな著者とタイトルを紹介したいと思います。

- 長谷川凌、*日兵衛海戦の信将*（「日米間の戦争勃発の事実」）、大日本シュッパン
 - くるせさぶろう、*ニチベイコショウノケイイ*（「日系交渉の年表」）、東京日一信文社¹³
 - 中間輝久、*ニチベイたたかうべきか*（「日本とアメリカは戦わなければならないのか？」）、新光社
 - 川村幹夫、*ニチベイふせんん*（「日米戦争反対論」）、海軍研究会
 - 末次信正と中野正剛、*ニチベイキキとソノミトシ*（「日系アメリカ人の危機とそれを見抜く」）、シン・ケイザイ・ジョーホーシャ
 - 安岡正篤、*東洋哲学哲学*（「東方政治哲学」）、玄光社
 - 宮崎市定、*とうようにおけるそうぼくしゅぎのみんぞくと文明式の社会*（「東部の単純な人々と文明社会」）、富山房
 - 石橋湛山、*ちょうぎけんせつのいぎとわがけいざいのたいきゅうりょく*（「長期建設の意義と経済のスタミナ」）、東洋経済新報社
 - 杉山平介、*シナから支那人、日本*（「中国、中国、そして日本」）、海蔵社
 - 吉野作造、*ジジモンダイコザ (7) 太極拳モンダイ*（「現在のトピックに関するコース (7) 中国の質問」）、NipponHyōronsha
 - 汪兆銘 (trans. Kurone Shōsaku)、*日本刀とタズサエテ*（「日本と一緒に持ってきた」）、朝日信文社
 - 和辻哲郎、*日本の信道、アメリカの国際*（「日本の忠誠心、アメリカの国民性」）、筑摩書房
 - 中河与一、*日本のりそ*（「日本の夢」）、白水社
 - 伊藤整、*せんそうの文学*（「戦争文学」）、全国書房
 - 武者小路実津、*ダイトアセンソシカン*（「東アジア大戦の個人的な印象」）、川出書房
 - 忍純平、*風仙城薬ロン*（「反戦条約に関する議論」）、国西連明協会
 - 清沢冽吉、*大二寺大修大戦の剣術*（「ヨーロッパにおける第二次世界大戦の研究」）、東洋経済新報社
 - 高橋亀吉、*せんじけいざいこうわ*（「戦時中の言説
-

- 経済学」）、こんにちの門大社
- 神田浩一、しそせんとセンデン（「戦争とプロパガンダを考え
た」）、柏正房
- 櫻井正、大東海峡初天市（「東アジアにおけるイスラームの成長の歴
史」）、三省堂
- NipponHōsōShuppanKyōkai (= NHK Shuppan)、*Shussei heishi o
okuru uta*（「兵士を前に送るための歌」）
- NHKシュッパン、きげんにせんろつびあくねんしょか（「日本の創立
2600年[1940]を記念する国歌」）
- NHKシュッパン、*Moyuruōzora*（「燃える天国」）
- NHKシュッパン、うみをわたる荒鷲（「海外に行くエアエース」）
- NHKシュッパン、北白川宮の宮デンカ（「ああ、北白川殿下！」）
- よみうり信文社、シナジヘンジツキ (2) - (15)（「中国事件の真の記
録」(2) - (15)）、ひぼんしゃ
- 宮井琴太郎、支那事変支那事変 (1) (2) (3)（「中国事件 (1)、
(2)、(3)」）、京亜京会で軍に同行して記録を集めた
- 玉井聖五郎、支那事変支那事変（「中国事件の十字軍の写真史」）、
中遊社
- 陸軍ガホシャ、しなじえん先生のしおり（「中国事件の古い戦場への
ガイドブック (全3巻)」）、陸軍十平武
- 海軍省、かがやく中生：支那事変助産師 (1)
(5) (6) (8)（「輝かしい忠誠心：中国事件における愛国心の感動的な物語
(1) (5) (6) (8)」）海軍京海
- 荒木貞夫、帝国の軍人聖心（「皇帝の精神」）、長風社
- 真山青果、のぎ将軍（「乃木将軍」）、大日本有弁会講談社
- 松波次郎、はがくれ武道（「はがくれスタイルの武士道」）、一郎莊
園
- 佐野靖、アツツと軍神ぶたいとこんき（「アツツ島の英雄軍の闘志の
記録」）、霊明長社
- 山中峰太郎、ノモンハン事件ヒシ（「ノモンハン事件の秘密の歴
史」）、誠文堂新光社
- 鶴見祐輔、ぼうちやうの日本（「拡大する日本」）、大日本有弁会講
談社
- RashBehariBoseとIshiiTetsuo、インド信楽必殺（「インド侵略の悲
劇的な歴史」）、東京二日一信文社
- 日本-タイ京会、大黒ツシ（「タイの歴史の概観」）、京亜日本社
- 松田信夫、にゅじランドの三行四元（「ニュージーランドの産業資
源」）、Shunchōsha
- 榊原淳、ビルマノアサ（「ビルマの朝」）、こんにちの門台社

- 山田孝雄、*国台の本義*（「国体の根底にある原則」）、法文館
- 文部科学省、*国台の本義*（「国体の根底にある原則」）、内閣印刷局
- 岸尾だいす、*国台法の剣術*（「国体法の研究」）、金商社
- 杉浦重剛と白取倉一、*国体しんぎ*（「国体の真の意味」）、世界文庫
観光会
- 徳富蘇峰、*鼓童日本の世界*（「インペリアルウェイ：日本のグローバリゼーション」）、民友社
- 影山正春、*鼓童男志研雪シアン*（「満洲と中国に帝国の道確立するための私的な計画」）、大日本生産党
- 内田良平、*しなかん：こくなんたる*（「中国について：来るべき国家危機」）、若林漢
- 柳田国男、*神道と民俗学*（「神道と民族学」）、明星堂商店
- 上原くんぞう、*兵頭上原まらいご* (1) (2) (3)（「標準上原マレーシア語 (1) (2) (3)」）、清南社
- 澤久治、*ゴビさばくたんんぎよう*（「ゴビ砂漠遠征。」）、めぐろ商店
- 石神聖、*あらすか、有龍山*（「アラスカ、アリューシャン列島」）、紀光青年社
- 日比野士朗、*ŪsonKuriiku*（「ウーソンクリーク」）、ChūōKōronsha
- 大の忠津、*雅楽*（「雅楽—伝統的な宮廷音楽」）、六光商会
- 菊池寛（ヒロシ）、*にせんろっぴあくねんしっしょ*（「2600年の歴史的抜粋」）、同盟通信社
- 養田胸木、*日本生神とかがく生神*（「日本の精神と科学の精神」）。日本社元里
- 亀井勝一郎、*日本人のし*（「日本人の死」）、新光社
- 大川周明、*日本生神研究*（「日本の精神の研究」）、明治書房
- 井上哲次郎、*Shūseizōho：日本生神の本しつ*（「日本の精神の本質—改訂版と拡張版」）、光文道商店
- Josef März、*Kaiyōchiseijigaku：rekkyōtoseikaiken*（「海の地政学：海の大国と支配」）、KagakushugiKōgyōsha
- Rudolf von Weldt、*角手土津は会せん下*（「このようにしてドイツは戦争を始めました」）、海蔵社
- ウォルター **パル** *しげんせんそう*（「資源の戦争」）、清文堂
新光社
- オスヴァルト・シュペングラー、*せかいはどこえいく*（「世界はどこへ行くの？」）、日本外治協会
- P. アーガス**、*せんしゃにくるどく-そう感知*（「ドイツ人を見る-

- 戦車からのソビエト最前線」）、岡倉商房
- ルドルフ・チェーレン、*両堂、民俗、甲賀：ちせいがくの幻想*（「自治領、国、州：地政学に関する元のテキスト」）= *Der Staat als*

三省堂 | 栄光海軍論（「イギリス海軍に関する言説」）、朝日信文社

- 高橋優、*あじあしんりゃくし*（「アジアにおける侵略の歴史」）、かすみがせき書房
- 宮圭司、*アメリカの大地日ぼりゃくし*（「日本に対するアメリカの陰謀の歴史」）、DaiTōaSha
- 斎藤英三郎、*英国の世界信楽市*（「英国の世界侵略の歴史」）、大東出版社
- 有田八郎、*Bei-EinoTōakakuran*（「東アジアにおけるイギリスとアメリカの混乱」）、Mainichi Shinbunsha
- 堀内謙介、*北米の世界しんりゃく*（「英米世界侵略」）、真一信文社

没収された本の著者によるGHQランキングのリストを調べた結果、非常に興味深いことが判明したので、補足番号7に注意してください。

GHQが発表した商品を最も多く排除した上位3社は、朝日新聞140項目、大日本友弁会講談社83項目、毎日新聞81項目です。

戦後長い間、これらの企業は左翼の反米的なムードを受け入れており、これらはアジアにおける日本の侵略と日本の混乱について鯉をかけ続けてきたマスメディアの代表的な歴史的マゾヒストです。これはおかしくないですか？面白くないですか？これについてどう思うか知りたいのですが。

岩波書店は日本共産党に占領された出版社であり、左折は純粋に戦後の発展でした。The アサヒ、毎日、講談社は岩波とは違います。私が見ているように、彼らがGHQによって「焚書」を受けたことは、彼らの精神の深いレベルでこれと密接に関連しています。打ち負かされた人々が彼らの精神の深さを打ち砕くと、彼らは勝利者と一緒にくつろぎ、彼らをお世辞にし、勝利者の神々を彼らの神々にすることさえします。

第2章： 日本の静けさの中心にある不従順 占領が始まったように

言葉と計画の「戦後戦争」

アメリカの占領政策の特徴の1つは、彼らが命令を出さなかったことでした。これ、しかし代わりに禁止それ。三浦朱門がずっと前の会話でこう言ったのを覚えています。たとえば、彼らはみんなに星条旗を家に吊るすように命じませんでした。代わりに、マッカーサーや占領軍を少しでも虐待したり、虐待したりした人は、強制労働者として沖縄に送られることで罰せられました。占領軍は、日本人の間で広範な敵意を引き起こすように行動しなかった。むしろ、不従順の恐れを生み出すためです。その恐怖が奥深くに潜んでいて、ある人から次の人へ無言で伝わり、日本人自身が前進し、自分たちで制限を推進したので、彼らはこれで成功しました。禁止事項は自動的に広がります。

占領は、日本人の人口を一度にキリスト教に無意味に変えようとはしなかった。しかし、信仰を破壊することは最終的に国の国力を固定し、彼らはそれが国を破壊するための最良の計画であることを知っていました。帝国の財産の大部分を没収し、家の防波堤であったはずの帝国の古代のメンバーが帝国の地位を奪われたにもかかわらず、彼らが帝国のシステムを残すことを許可したのはこのためです。彼らは皇帝に彼の「人間宣言」を発行させ、皇太子の家庭教師としてクエーカー教徒の未亡人を任命させました。彼らはすべての障壁を取り除き、他の日本人と同じように皇帝を作りました。これは、皇室を民主化されたものとしてドレスアップしました。

彼らが日本人を文明化するために働いていると彼らが信じていたと私は推測することができます—教育と日本を先進文化にすることへの厄介で邪魔な宣教師の熱意。

私が思うに、GHQによる検閲と本の禁止は、命令を出さないという最も完全な形でした。これ代わりに禁止それ、そしてそれは思考の究極の破壊と見なされなければなりません。特に、数十年後の本の禁止を振り返ると、時が経つにつれ、非常に効果的であることが判明したのは、それらの時限爆弾の1つでした。正確な数を数えることはできませんが、タイトルに「皇室」、「国体」、「天皇」、「天国」、「神道」、「日本の精神」と書かれた約500冊の本が完全に放棄されました。占領による信仰の破壊を見抜いた計画があったようです。私は伝統的なアングロサクソン人の方法を信じています

知事は日本以外の占領国に押し付けられ、そこで定着した。日本がフィリピンや韓国ほどキリスト教を受け入れなかった理由は、2000年の仏教と神道によって培われた彼女の特異な歴史の深さであるとしか考えられませんか。

特に、国民の目の前で日本の闘志の形成期の17年間の歴史を消し去り、目隠しを着用させた本の禁止は、日本人の魂の深みを損なう恥ずべき行為でした。しかし、それだけではありませんでした。占領軍が日本に新しい歴史、つまりアメリカの創造の視点を教え込むという前提もありました。つまり、満洲事変以降、日本が悪魔の国、侵略国になり、実際に戦争を望まず、戦争を阻止しようとしたアメリカが、ついに立ち上がって立ち上がらなければならなかった愚かなおとぎ話。悪魔の国を撃ちます。このおとぎ話を日本人の頭に押し込むことは絶対に必要なプロセスでした。

アメリカは誰もが知る前に日本に民主主義と再生を与えるという神話に1億人が完全に支配されていました。

言い換えれば、戦後の戦争、つまり言葉と計画の戦争が1945年から続いたと言っても過言ではありません。GHQの民間検閲支隊（CCD）はその関与の最前線にあり、6人のメンバーからなる研究セクション（RS）は、いわば白兵戦の先駆者でした。興味深いことに、1946年の初めに、GHQは不安であり、本の禁止の実施は失敗するだろうという感覚があったのは、日本人の間に秘密の抵抗があったという感覚があったからかもしれません。占領軍に対する地下の不服従。そうは言っても、日本人は全体として少しずつ目隠しを素直に身につけることに慣れていて、誰もがそれを知る前に、1948年から1949年頃までに彼らは皆親米になりつつありました。

幼い頃から、一般の日本人には広く不服従の気持ちがあったことを覚えていますが、悲しいことですが、アメリカの占領軍に抵抗することなく、最も脆弱なのはリーダーシップクラスではなかったのではないかと思います。特に、知識人、学者、文学者などの知識人の弱さは恥ずかしいものでした。これは、戦前に一流の法学者として認められていた東京大学文学部の牧野英一氏のような公務員の追放など、日本のアメリカとの協力を再検討し、評価する必要があることを意味します。金子武蔵と尾高邦雄が個別に何をしたかを判断するのに十分な証拠はありませんが、1946年から47年の東京大学文学部では、

考えてみれば、彼らは自分たちの民を裏切っていなかったのでしょうか。彼らは、ナチス占領下のフランスのヴィシー政権の協力者たちが犯したような犯罪を犯し、戦後フランス人によって裁かれました。したがって、彼らは同じ運命をたどるべきです。

どういうわけか、今日まで日本はこれらの問題が起こっていることに気づかずに進んできました。これは日本が敗北した国だったからでしょうか。

確かに、フランスがまさに勝利国。とはいえ、国の歴史を消し去り、文化を全滅させ、市民の愛国心を破壊するという点では、特定の野蛮な行為を除いて、ナチスドイツとアメリカの占領軍によって行われたことには実際には違いはありません。

没収は、知事が指定した都道府県の知識人や知識人からの助言に基づき、文部省副大臣の一定の指示に従って行われた。地元の先生以外教育に関連しています。このため、各県知事室のアーカイブの奥深くに埋もれている「宣伝文の押収責任者」のリストは、1948年頃から不足してはならない。間違いなく、これらの人々は無実の顔をして、後に彼らの地域で有名な個人になり、ある程度の地位を獲得しました。かなりの時間が経過しましたが、プロパガンダテキストの押収に責任のあるこれらの役人が誰であることを確認するために、彼らの名前を公開する必要があります。この種の問題には時効はありません。正確な悔恨の結論がなければ、日本人はどれだけ時間が経っても自立した人間として立ち上がることはできません。

プライベートメッセージが検閲された恐ろしいシステム

まだ生きているイベント関係者への質問が必ず行われ、誰が禁止を実行したのかを突き止め、他の調査員が私をフォローしてくれることを願っています。しかし、「検閲」の状況は研究されており、多かれ少なかれ知られています。江藤淳の本に精通している人もいるかもしれませんが、とどろきろく（「ロックされた言語室」）。「占領軍の検閲と戦後の日本」という副題が付いています。

これは、メリーランド大学の図書館でのGHQ検閲の問題を調査し、その調査結果を日本人に知らせた本でした。この作品は、プラング文庫の非常に重要な調査です¹⁴そしてその背景、そしてそれはかなりの影響を与えたと言っても過言ではありません。もちろん、本のテーマは本の禁止ではありません。確かではありませんが、私が知る限り、江藤は禁止された本の存在についてあまり知りませんでした。彼はCCDの活動を研究しましたが、そのサブセクションであるRSについては言及していません。

江藤は「江藤」というタイトルの記事を書いた「『アメリカは日本でのケンエツをイカニジュンビシテイタカ?』（「アメリカは日本での検閲にどのように備えていたのか?」）1982年11月版に掲載されたしょうくん!雑誌。とどろきろくプラング文庫の存在は1965年半ば頃に日本で知られるようになり、国会は1972年以来何度も没収された資料の返還を要求してきました。国立国会図書館はその時からそれらの材料の重要性を知っています。GHQの書類はすべて集められ、1949年にアメリカに出荷されましたが、1992年に、作業がPrangeを配置し始めました。

名前	ノート	作品 禁止された
滝川正二郎	学者	0
都留重人	学者	0
天野貞祐	学者	0
箕面達吉	学者	0
横田喜三郎	法学者・最高裁判所長官	0
森戸辰夫	エコノミスト。	0
美濃部亮吉	エコノミスト。	0
大内兵衛	エコノミスト。	0
西田幾多郎	哲学者。	0
小林秀雄	文芸評論家。	0

補足文書：占領と政府の歴史

南洋諸島

東の地域

島の名前	発見の年、職業、 および/または委任	面積 (平方 マイル)	人口 (1936年)
ハワイ諸島	1528 (スペイン) ; 1898年 (アメリカ)	6,456	396,715 (a)
テライナ (ワシントン島)	1892年 (イギリス)	6	131
タバアラン (ファニング環礁)	1892年 (イギリス)	15	175
フェニックス諸島	1886年 (イギリス)	16	95
サモア	1772年 (オランダ) ; 1812年 (フランス) ; 1872年 (米国) ; 1899年 (イギリスとドイツ) ; 1920年 (米国、ニュージーランドの委任)	776	66,000
トンガ	1643年 (オランダ) ; 1773年 (イギリス)	385	31,604
モールデン島	1886年 (イギリス)	35	102
マルケサス	1595 (スペイン) ; 1777年 (フランス)	490	999
ソシエテ諸島	1605 (スペイン) ; 1767年 (イギリス) ; 1768 (フランス)	657	30,824
トゥアモト諸島	1606 (スペイン) ; 1843年 (フランス)	222	4,346
ピトケアン島	1767年 (イギリス)	2	209
クック諸島	1774年 (イギリス)	111	12,000

中央部

島の名前	発見の年、職業、 および/または委任	面積 (平方 マイル)	人口 (1936年)
マリアナ	1521 (スペイン) ; 1899年 (ドイツ語) ; 1920年 (日本のマンデート)	705	109,847 (a)
マーシャル諸島	1527 (スペイン) ; 1885年 (イギリス) ; 1886 年 (ドイツ) ; 1920年 (日本のマンデート)	*	*
パラオ	1527 (スペイン) ; 1898年 (ドイツ) ; 1920年 (日本のマンデート)	*	*
キャロライン島	1527 (スペイン) ; 1899年 (ドイツ) ; 1920年 (日本のマンデート)	*	*

ジャルット環礁	1888年（ドイツ）；1920（日本語委任）	*	*
グアム	1521（スペイン）；1898年（アメリカ）	225	22,137（a）
ニューギニア	1511（オランダ）；1606（スペイン）；1885-6（英国、ドイツ、オランダ）；1920年（英国、オランダ、オーストラリアの委任）	9,300（e）	548,291
ナウル	1798年（ドイツ）；1920（イギリス委任）	8	3,097（a）
ビスマルク諸島	1615（オランダ）；1884年（ドイツ）；1920年（オーストラリアの委任）	181,571	75,920
オーストラリア	1605（オランダ）；1770年（イギリス）	2,974,581	6,806,752
ギルバート諸島	1764年（イギリス）	166	27,029
ツバル	1781年（スペイン）；1892年（イギリス）	14	4,124
バナバ島 （オーシャン島）	1892年（イギリス）	6	2,791
ソロモン諸島	1567（スペイン）；1616（オランダ）；1857年（英国）；1884年（ドイツ）；1894年（英国）	375,000（e）	94,155
サンタクルス諸島	1767年（イギリス）	380	5,000（e）
ニューヘブリデス	1606（スペイン）；1774年（イギリス）；1906年（英仏共同マンデート）	5,700（e）	40,000（b、e）
ニューカレドニア	1774年（イギリス）；1843年（フランス）	8,548	53,245
フィジー	1643年（スペイン、オランダ）；1840年（米国）；1874年（イギリス）	7,083	201,086
ニュージーランド	1642（オランダ）；1769年（イギリス）	103,722	6,806,752

西部

島の名前	発見の年、職業、および/または委任	面積（平方マイル）	人口（1936年）
フィリピン	1521（ポルトガル、スペイン）；1569（スペイン）；1898年（アメリカ）	97,104	13,266,700
モルッカ （スパイス諸島）	1512（ポルトガル）；1622（オランダ）；1798年（英国）；1814年（オランダ）	1,350	720,558（d）
ボルネオ	1511（ポルトガル）；1604（オランダ）；1798年（英国）；1842年（イギリス、オランダ）	285,391	2,944,661（c）
スラウェシ	1511（ポルトガル）；1798年（イギリス）；1802（オランダ）；1810年（フランス）；1814年（オランダ）	72,986	4.231.906
スマトラ	1511（ポルトガル）；1798年（イギリス）；1802（オランダ）；1810年（フランス）；1814年（オランダ）	1,774,448	6,779,706

ジャービス島 (バンカー島)	1511 (ポルトガル) ; 1798年 (イギリス) ; 1802 (オランダ) ; 1810年 (フランス) ; 1814年 (オランダ)	4,611	205,363
リアリ	1511 (ポルトガル) ; 1798年 (イギリス) ; 1802 (オランダ) ; 1810年 (フランス) ; 1814年 (オランダ)	12,235	298,225
バリ	1511 (ポルトガル) ; 1798年 (イギリス) ; 1802 (オランダ) ; 1810年 (フランス) ; 1814年 (オランダ)	3,973	1,802,683
Java	1619年 (オランダ) ; 1811年 (イギリス) ; 1816年 (オランダ)	— —	— —
ティモール	1515 (ポルトガル) ; 1859年 (ポルトガル、 オランダ)	7.300	460.655 (b)
クリスマス島	1777 (スペイン) ; 1888年 (イギリス)	62	1,237
ラブアン	1846年 (イギリス)	40	8.111 (a)
シンガポール	1619年 (イギリス)	220	651,486 (a)
セイロン	1505 (ポルトガル) ; 1602 (オランダ) ; 1782年 (英国)	25,332	5,312,548 (c)

このチャートは主に1939年世界年鑑、日本国際関係学会編。